

## 三宅泰雄「科学者の眼 人・自然・社会」三省堂新書68（一九六九年）

### 核兵器と科学者の苦悩

#### 一 プロローグ

一九五四年三月一日という日は、世界の歴史の転機の日であった。この日、焼津の漁船「第五福竜丸」の乗組員、二十三人が放射能症のうたがいで、国立東京第一病院に入院した。

アメリカ原子力委員会は、この年、ビキニ・エニウエトク環礁で、一連の水爆実験、キヤッスル・テストを計画した。この最初の爆発が三月一日におこなわれた。第五福竜丸は、アメリカ原子力委員会のもうけた制限海域の外側、ビキニ環礁から東に百数十キロはなれた海域で操業していた。水爆はブラボー爆弾とよばれた。環礁上にすえつけられたまま、それは爆発した。その結果、環礁には直径五百メートル、ふかさ数百メートルの穴があいた。

サンゴ礁の石灰質岩石は、こなみじんにこわれ、空たかくふき上げられた。岩石の粉末には、つよい放射性物質が付着していた。その白い粉末が、数時間ののちには、音もなく第五福竜丸の船上にふりはじめたのであった。その白い粉末―死の灰―にふくまれた放射性物質は一グラムあたり、一・四キュリーにもたつすることが、東大をはじめとする多くの大学の分析でわかった。これは、純粹のラジウムよりもつよい放射能であった。

戦前、東京の癌研究所に、五グラムのラジウムがあり、治療にもちいられ、それがじまんにもされていた。福竜丸にふった死の灰の量は、一平方メートルあたり〇・五グラムから五グラムくらいと推定された。これが二十三人の乗組員を重篤な急性放射能症におとしいれたのは、とうぜんであった。かれらは、せまい船内で、莫大な量のラジウムにとりかこまれたにひとしい状態であった。その中の一人、久保山愛吉さんは九月二十四日に亡くなった。第五福竜丸がもちかえった貴重な漁獲物は、放射性物質でつよく汚染されていることがわかった。そののち、多くの漁船で、魚および船体の汚染が発見された。その年のおわりまでには、じつに二百三十トンにおよぶマグロが廃棄されたのであった。水産物の価格は、長期にわたって暴落し、水産界に大打撃をあたえた。

海の放射能の実態をつかむために、水産庁の調査船「俊鶴丸」が、科学者二十三人をのせて、ビキニ・エニウエトク海域にむかったのは五月十五日のことであった。このころ、アメリカ原子力委員会は、海水や、海洋生物の放射能汚染は、まったくみとめられないといっていた。それにもかかわらず、五月三十日に、俊鶴丸の研究者は、海水、プランクトン、クラゲなどから、つよい放射能を検出した。魚の内臓の中にも、放射性物質があった。北太平洋の赤道海域一帯は、放射性物質でつよく汚染され、ビキニ環礁から千数百キロ以上もはなれたところでも、海水中から放射能がみいだされた。環礁から百数十キロ西の海

域の水は、アメリカのオーク・リッジ原子力研究所の廃水池（ホワイト・オーク・レイク）の水とおなじくらい、つよい放射能をもっていた。

俊鶴丸が東京港を出発した翌日、全国的にふった雨の中から、つよい放射能が検出された。一月くらいまえから、雨の中に人工放射性物質が、まじっているらしい、とのうたがいがもたれていた。五月十六、十七両日、広範囲にふった雨で、そのことが確認された。俊鶴丸は、いろいろな困難を克服し、七月四日に無事にかえってきた。そのころ、私は、こうかいている。

「いままでの外国人の研究は、すべて、水爆をどうして、うまくつかうか、という研究であった。俊鶴丸だけが、はじめて、どうしたら、水爆の危険から人類をまもれるか、という研究をおこなった。俊鶴丸調査の功績は、十九世紀末のチャレンジャー号探険に匹敵するものであり、全人類にささげられた貢献として、ながく人々に記憶され、感謝されるであらう」。

チャレンジャー号探険は、十九世紀末、イギリスのおこなった、世界海洋の一周調査で、この探険ではじめて、海洋の科学的な実態がはっきりになった。